人文社会系研究科

Ⅰ　教育水準　.....　教育 11-2

Ⅱ　質の向上度　.....　教育 11-4

Ⅰ　教育水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1.　教育の実施体制

期待される水準を上回る

[判断理由]

「基本的組織の編成」については、７専攻を設置し、各専攻にコース（25）及び専門分野（35）を設けることにより、多彩な学問分野に応じた組織となっている。学内外の兼任教員の協力を得て、多分野にわたる講義と、個別指導が可能となるような徹底した少人数教育による演習を保証し、新たな研究成果を教育し得る柔軟な組織編成がなされているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

「教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制」については、新任教員研修・文化交流茶話会・教育改善講習会等で教育改善を目指す機会を設けるとともに、学生に対する授業アンケートの実施、教務委員会・大学院教務入試制度委員会で教育内容・方法の改善を行い、学生と社会の要望に応えつつ、最新の研究動向を教育に取り込む持続的な改善のために教育改善検討小委員会を設置しているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、人文社会系研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育の実施体制は、人文社会系研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

2.　教育内容

期待される水準にある

[判断理由]

「教育課程の編成」については、特殊研究や演習を通じて高度な専門教育を行うとともに、他専攻・学部の授業を自由選択科目として履修することを可能とし、かつ「多分野交流演習」等を通じて幅広い教養の修得ができるよう配慮してある。さらに、修士論文・博士論文の執筆に向けた科目（修士・博士論文指導）を配置しているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「学生や社会からの要請への対応」については、教育高度化への社会的要請に応え、教職課程プログラムを修士課程の副専攻として取得できる道を拓き、カリキュラム編成を改善して学芸員資格の取得を可能にした。また、全学の学生に向けて外国語による論文執筆

を補助する「アカデミック・ライティング」の授業を開設し、当該学部・研究科の留学生に対しては特別に日本語教育プログラムを国際交流室において実施して、日本語での論文執筆にいたる過程を補助している。また、文化資源学専攻においては、インターンシップ制度を導入し、社会人教育にも積極的に取り組んでいるなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、人文社会系研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育内容は、人文社会系研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

3. 教育方法

期待される水準を上回る

[判断理由]

「授業形態の組合せと学習指導法の工夫」については、特殊研究、演習、論文指導の３種類の授業形態がバランスよく設定されており、また、学習指導上の効果が実践的になるようにフィールド型授業、オムニバス授業、多分野交流演習等も設けられるなど、学習指導法の工夫もなされている。修士・博士論文の完成のために、「論文指導」の科目が設置され、特に博士課程では「博士課程研究計画書」と「予備論文」の執筆が義務づけられ、実践的かつきめ細かな指導が行われているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

「主体的な学習を促す取組」については、ガイダンスの実施、新入生に関しては、助教と在学生からの指導を受け自主的に学習計画を立てるようにしていること、さらに、学生の主体的な学習支援のための指導が各教員やリサーチ・アシスタント（RA）から不断になされている。図書館の蔵書の充実化、開館時間の延長も学生の要望に応えたものになっている。また、学生の研究意欲向上のために、独自の学術奨励費が設けられ、学生の研究活動のための旅費が支給されているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、人文社会系研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育方法は、人文社会系研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

4. 学業の成果

期待される水準を上回る

[判断理由]

「学生が身に付けた学力や資質・能力」については、学生の学会での発表数（修士・博士全体で平成 19 年度 324 件）、論文数（同年欧文 47 件、和文 347 件）、受賞数（ 7 件）、研究費獲得件数（89 件）が増加しており、課程博士号取得者も毎年約 50 名と高い水準を保っているなどの優れた成果があることから、期待される水準を上回ると判断される。

「学業の成果に関する学生の評価」については、全学学生実態調査や研究科独自の調査によって、前者では過半数、後者では 89.5％の学生が満足していると回答しているなどの優れた成果があることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、人文社会系研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、学業の成果は、人文社会系研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

5. 進路・就職の状況

期待される水準にある

[判断理由]

「卒業（修了）後の進路の状況」については、相当数の者（平成 19 年博士課程修了生 148 名）が修了後、教育・研究職や高度専門職業に就いている。人文社会系研究職ポストの現状からみれば、良好な就職状況といえるなどの優れた成果があることから、期待される水準を上回ると判断される。

「関係者からの評価」については、平成 19 年に就職先関係者に対して聞取り調査を実施し、修了生について専門的能力と同時に広範な適応力をもつことが評価されている。また、学生のアンケート調査では「研究者としての自覚ができた」などの自己評価が多くみられたなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、人文社会系研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、進路・就職の状況は、人文社会系研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

II 質の向上度

1. 質の向上度

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

当該組織から示された事例は１件であり、そのすべてが、「大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している」と判断された。